

# 住井すゑとその文学の里(六十)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

## 部落解放同盟への参加と 第三回部落解放全国婦人 集会への出席

前回に、住井すゑが、小説『橋のない川』という題名で、大和(現奈良県)の部落の差別問題を追及する構想を描いたと記述しておいた。

しかし、住井は、大和の部落の隣村で生まれ育ったものの、18歳でその故郷を離れて以来、ほとんど大和に帰っていないので、部落についての実態を全く知らなかった。

折しも、昭和33年(1958年)3月18日、東京・青山霊園にある「解放運動無名戦士墓」での第11回追悼会にあたって、墓の改修工事の施工を決定し、資金を募集していた。犬田卯著『日本農民文学史』出版のきっかけを作ってくれた渋谷定輔が、募金活動に加わっていた

たこともあって、住井は、その印税の一部を、ここに寄付することにした。そして、机の中に入れておいた卯の遺骨をそれが縁で、分骨してこの墓に埋葬した。

住井は、同墓地に遺骨を納めたその足で、神田神保町の部落解放同盟の東京事務所に向いて同盟への参加を申し出た。戦時体制下で水平社は消滅していたが、戦後、部落解放全国委員会として再建され、昭和30年(1955年)に部落解放同盟と改称していた。

部落解放同盟が発行する解放新聞の昭和33年3月15日号で、5月4・5両日に奈良市で部落解放同盟の第三回全国婦人集会があることを知り、住井は出席してみようと、5月1日に西下した。

住井は、まず部落解放同盟東京事務所の責任者に紹介状を書いてもらっていた、京都市下京区にある部落問題研究所を訪ね、所員

と会った。部落問題研究所は昭和24年(1949年)2月以来、機関誌『部落問題研究』を発行していたが、当時はその名称を「部落」と改称していた。

一方、住井が参加した昭和33年5月4・5両日の部落解放同盟第三回部落解放全国婦人集会は、青葉の美しい奈良公園の市庁舎別館において開催された。その年は教員に勤務評定が施行された年だけに特に若い婦人教師の参加が多かったが、その他全国各地から先生に引率された学生、幼児をおぶった主婦、さらには杖をついた白髪の老婦人など1400名もの人々が参加し、会場は熱気でむせ返っていた。集会は、「勤務評定反対運動強化」、「同盟の方針にのっとって闘う議員を議会におくる」、「原水爆禁止平和運動の推進」などの基本方針を可決して、解放歌、

のひらの

歌、しあわせの歌を大合唱の後、2日間の全日程を終了した。

その集会で住井が把握できた「部落」の現状は、貧困で、部落外の人と結婚はできない。就職は不利だし、男性は職場で差別され、女性は近所付き合いで、子どもは学校で差別を受ける。全く不合理なことばかりであった。

引用文献は『橋のない川 住井すゑの生涯』(北条常久著・平成15年風濤社刊)、『住井すゑの世界その生涯と文学』(前川む一編・平成13年株式会社解放出版社刊)外である。



↑第三回部落解放全国婦人集会の手びき  
- 『橋のない川 住井すゑの生涯』より転載 -